

ヴァレリーと『リュシアン・ルーヴェン』：魅惑されたナルシス

高木, 信宏
九州大学大学院人文科学研究院：准教授

<https://doi.org/10.15017/1906136>

出版情報：Stella. 36, pp.183-206, 2017-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



ヴァレリーと『リュシアン・ルーヴェン』

——魅惑されたナルシス——

高 木 信 宏

『スタンダール全集』の一環として1927年3月にパリのシャンピオン書店から刊行された未完の長編小説『リュシアン・ルーヴェン』（以下『ルーヴェン』と略記）にポール・ヴァレリーが寄せた序文は、スタンダールによる自己の認識とその韜晦、独特な魅力を放つ文体の特徴などを、従来にない独創的な視点から深く掘り下げて論じたエッセーであり、今日においてもなお彼の卓見や示唆するところの多くは傾聴に値する。なかには辛辣な評言も散見するが、当時の状況に照らすならば、それらはパリを中心に興ったスタンダリズムの有したネガティブな側面、すなわちマニャックで熱を帯びた文学的偶像崇拜という現象に対する解毒の効果を意図した結果でもあったのだろう。スタンダールの文学についての批評と受容、双方の点においてきわめて興味深い論考であり、時にヴァレリーの論点をあらためて検討する誘惑にすら駆られるが、本稿の目的はそこにはない。

全集の編纂者ポール・アルブレの依頼により執筆されたこの序文は、ある意味では特異なテキストであろう。その出版に先立つ1927年2月、スイス人の実業家アンリ＝ルイ・メルモの興した書店から『スタンダールについてのエッセー』という題名で単独の一書として上梓され、また同じ春に、『ヌーヴェル・リテレール』誌と『コメルス』誌に抜粋が載っただけでなく、同年の末にはジャック・シフリンが采配を振るうプレイアッド出版社から再び単行書となって流布している——後年「スタンダール」と題を変えて、『ヴァリエテ II』（1937年）にも収録¹⁾。作品自体の紹介や立ち入った論評がほとんどないこのテキストは、いかにも小説を離れて一人歩きしうる内容を持ち、序文と言うよりはむしろ一個の独立したスタンダール論としての性格が強い。そのためであろうか、『ルーヴェン』に言及した冒頭の数頁については、これまで研究者の関心を引くこと

はほとんどなかったようである。わずか1頁ほどで述懐される読書の思い出と小説への称賛にしても、序文という性格のせいでその値打ちが割り引かれて読まれたのかもしれない。しかしながらテキストの特異性は、そういった慣習から外れた内容以上に、かつてヴァレリーが『ルーヴェン』に感動したことを打ち明ける冒頭の告白に由来しているように思われる。なぜ『テスト氏との一夜』の作者はそれほどこの小説に魅了されてしまったのか。かかる問いの検討を通じて我々が試みるのは、詩人によるスタンダール受容の再考に向けた端緒の模索であり、彼を虜にした『ルーヴェン』に固有の特徴を照らし出すための新たな視角の探求にほかならない。

*

当時『ルーヴェン』の序文を読み、いち早く違和感を覚えたのは、ヴァレリーの朋友、アンドレ・ジッドであった。『日記』の1928年2月13日の頁には、その読後感が次のように記されている――

昨夜、落掌したとても美しいシフリン版の、ヴァレリーによる『リュシアン・ルーヴェン』の序文。そのなかで私は、なにかしらの和解の願望を、不興をかうことへの恐れのようなものを、初めてヴァレリーのうちに感じる。今であればヴァレリーは、『ルヴュ・エブドマデール』誌に掲載したパスカルについての見事な論考をあえて書いたりするだろうか。²⁾

ジッドはヴァレリーの序文に、後者にあつておよそ異例な、かつてない書き方を看取している。引用箇所の特異性にはさらに率直な印象が綴られており、「知性というより親近感を、そして親近感以上に和解の願望や不興をかうことに対する恐れ、お追従」を感じたとある³⁾。ブレーズ・パスカルの生誕300周年を言祝ぐ『ルヴュ・エブドマデール』誌の特集号（1923年7月14日）に寄せた論考、「『パンセ』の一句を主題とする変奏曲」のなかでヴァレリーが「この無限なる空間の永遠の沈黙が、私を畏怖させる」という名句をとりあげて、卓越した技巧によって隠された著者の欺瞞を指弾していただけに、『ルーヴェン』の序文を読み、「不本意ながらとても美しく」⁴⁾感じてしまったジッドは、そこにパスカルに劣らぬ修辭の技を認めて意外の感に打たれたのであろう。確かにヴァ

レリーは『パンセ』についてこう書いていた――

私は技巧と自然とのこうした混交を前にすると、落ち着かない気持ちにならざるをえない。作家が人間の真実の感情に手を突っ込んで、それを実際以上に深刻なものにしたり、そこに作為的に強度を付け足したりしておきながら、人々に対しては自分の技巧を自分の感動と取り違えてもらおうとしている様子を目にすると、私はそれを不純でいかがわしいと思わざるをえないのである。作品中における真実と虚偽とのこうした混同は、その取り違えが私たちに何らかの信念を持たせたり、ある性向をすり込もうという意図のもとに行われているのではないかと感じられるときには、はなはだしく不快なものとなる。もし君が私を誘惑したり、あるいは驚かせようと望むなら、私に君の手が、その手が描いているもの以上にはっきりと見えるようなことがないよう気をつけたまえ。

私にはパスカルの手が見えすぎる。⁵⁾

だが、はたしてジッドは詩人に倣って、「私にはヴァレリーの手が見えすぎる」と書けたであろうか。

ジッドが『ルーヴェン』の序文に嗅ぎとった読者に対する効果、ヴァレリーとしては異例な詐術の当否を判ずるのがそう簡単でないのは、序文のなかでヴァレリー自身がスタンダールにおける同様の問題を煎じ詰めているからである。この小説家における虚栄心と自尊心の働き、すなわち「読者公衆に気に入られ、栄光の殿堂入りを果たしたいという激しい願望」と「何もののにも依存せずに、自分に異議を唱えるもうひとりの自己の声にだけ従って、紛れもなく自分自身であろうとする偏執」とが対立し、相克する生のシステムを剔抉したヴァレリーが⁶⁾、読者におもねるような書き方を安易にしたりはしまい。しかも、格調高く詩的な文体を厭うスタンダールの文章に彼が認めるのは、「真実」かつ「誠実」であろうとする意志に支えられた別種のレトリック、いわば自らの肉声を響かせようと目論むエクリチュールにほかならない――

人が働きかける真実の場合、どうして最良のものを選ばずにいられよう。我々は必ずや、対象を強調し、際立たせ、色づけし、鮮明さ、力強さ、官能性、内面性、そして露骨さの点でモデルよりもその度合いをいっそう増さずにはいられないのである。文学において、真実なるものはその存在を考えることすらできないのだ。[…]

したがって、人を欺くふたつのやり口がある。ひとつは美化する技によって。いまひとつは、真実にしくしようとする専心することによって。⁷⁾

書くという行為をめぐる術策のありようを洞察するヴァレリーが、序文の執筆に際して自らはなにも意図せずに文を綴ったとは到底考えられまい。「文学において、真実なるものはその存在を考えるとすらできない」と述べる彼にとって「真実」とは畢竟、書法の問題、つまり如何に表現するかという選択の問題となろう。ヴァレリーは同じ箇所でもこうも述べている――

真実は、それが率直さからでたものであれ、奇行さゆえのものであれ、細部への過剰なこだわりによって由来するものであれ、無頓着さの結果であれ、はたまた多少とも恥ずかしい事柄の告白、とはいえ必ず選ばれた、つまりあらゆる手段に訴え、つねに出来るかぎり選りすぐった事柄の告白によるものであれ、たとえパスカル、ディドロ、ルソー、あるいはバールにかかわる場合であっても、さらには我々の目に晒される赤裸々な生活が、説教師、破廉恥漢、道德家もしくは放蕩者のものだとしても、その真実はいつも例外なく精神の演劇の規則に従って明るく照らされ、彩色され、そして美化されているのである。⁸⁾

このように考えるヴァレリーが、もちろん自らを除外するはずがない。「真実」を扱う言説において例外はなく、とりわけ内的な真実の表象をめぐるアポリアは告白に存すると考える彼は、序文の冒頭で自らの読書体験を振り返って語るとき、とうぜんその行為に避けがたく付随する修辭を意識しながらテキストを綴ったはずである。では、彩色や美化が不可避であるならば、ヴァレリー自身はどのように語ったのか――

その時まで私は、恋愛についてまったく何も読んでことがなかった。読んだとしても酷くうんざりさせられただろうし、馬鹿げているか、無益なものに思えたであろう。若く未熟だった私は恋愛をあまりにも貴び、むやみに蔑んでいたので、数々の最も著名な作品にさえ、強烈さの点でも、あるいは真実さ、厳しさ、甘美さなどの点でも満足できるものを何も見いだせずにいた。しかしながら、『ルーヴェン』の世界に一步足を踏み入れると、ド・シャステレール夫人の人物描写における並みはずれた繊細さ、主人公たちの抱く感情の高貴で深遠なさま、ある種の沈黙のうちに抗しがたい力をもつ恋心の進展、さらには、高まる気持ちちをうまく抑制し、恋なのかどうか不確かな状態にその恋心を保つ卓越した技量等々にすっかり魅了されてしまい、はからずも読み返してしまったのである。おそらく私には、これらの名状しがたい美点に心を深く動かされる、私なりの理由があったのだろう。⁹⁾

自身の感動の在りかを率直かつ簡潔に打ち明ける一節だが、しかし自らの文学

的なスタンスを意識しつつヴァレリーは筆を執ったはずで、やはりある効果ははかられたことは否めない。当時これを目にした読者のなかには、アンドレ・ブルトンが1924年に公刊した『シュルレアリスム宣言』で、「侯爵夫人は5時に外出した」という文言とともに小説に対するヴァレリーの否定的見解を取り上げたことを思い起こし、驚きを禁じえなかった者もけっして少なくなかったのではあるまいか¹⁰⁾。というのも、世紀末に文学の民主化を背景にして「小説の危機」がパリの文壇を中心に作家たちの関心の対象となり、小説の表現形式としての可能性と限界とが問われて以降¹¹⁾、その余波は第1次大戦後も静まるどころか、文芸批評家ポール・スーデーらにより先導された反＝小説の動きとなって再び顕在化する一方で、ブルトンの『宣言』によってシュルレアリスムとヴァレリスムの団結という意想外の展開を見せたからである¹²⁾。このような時代の文脈を知る人々にとって、小説を軽んじるヴァレリーが『ルーヴェン』の描き出す恋愛に心を深く動かされたという告白は、いわば不意打ちに等しい効果を発揮したであろうことは想像に難くない。

ジッドが序文に感じた「和解の願望」「不興をかうことへの恐れ」といった、彼のヴァレリー像にそぐわない印象は、間違いなくこの回想部分に関係している。とはいえ、そう考えられる理由は、小説に魅了されたという告白の意外性だけにあるのではない。序文を読んだジッドがパスカルに関するヴァレリーの論考を想起し、なおかつ序文のテキストを「不本意ながらとても美しい」と感じてしまった次第は、先の引用につづく箇所由来していよう――

そもそも私は、そうなってしまった自分に驚いたのだ。というのも、ふだん私は、作者が技巧の限りを尽くして描き出す感情と自分自身の感情との区別がもはやはっきりつかないぐらい、文章の技に惑わされて当惑したこともなければ、今もなお苦しむこともないからである。私には筆とそれを手にした人間が見える。彼のもたらす感動に興味はないし、必要ともしていない。彼にはただその方法についてのみ教えてくれることを求める。だが、『リュシアン・ルーヴェン』は私の忌み嫌う混淆を、奇跡的にも私のなかに引き起こしたのである……。¹³⁾

ここでヴァレリーが3年ほど前の自身の論説「『パンセ』の一句を主題とする変奏曲」、そしてその決め台詞、「私にはパスカルの手が見えすぎる」を読者に透かし見させる書き方で、最上の賛辞を『ルーヴェン』に呈しているのは明らか

である。パスカルの巧みすぎる表現を非難した自らのテキストをあえて下敷きにして、絶妙な修辭的効果を狙うという倒錯した大胆な戦略。「今であればヴァレリーは、『ルヴェ・エブドマデール』誌に掲載したパスカルについての見事な論考をあえて書いたりするだろうか」と疑念を呈するジッドの読みは、この点に限ればまさしく正鵠を射ていよう。

しかしながら、レトリックを見抜きながらもその巧妙さにはからずも感じ入ってしまった『贋金づくり』の作者は、読後に覚えた違和感をはっきりと見定めるにはいたらなかった。ジッドの言う「和解の願望」「不興をかうことへの恐れ」とは、ヴァレリーの当時の立ち位置を勘案すれば、文壇や読者への配慮を意味するのであろうが、彼が序文の印象をそう曖昧にしか言い表せなかったのは、おそらく小説にすっかり魅了されるという、「テスト氏」の造型者らしからぬ人並みのありふれた経験を、最大級の賛辞を添えて公にしてしまった旧友の真意を汲みとりかねたからではないか。互いの気質の顕著な相違や志向する文学の懸隔にもかかわらず¹⁴⁾、青年時代より交誼を結んできたジッドでさえ、ヴァレリーが仄めかすにとどめたところには思っていたらなかったようである。回想に登場する、「これらの名状しがたい美点に心を深く動かされる、私なりの理由があったのだろう」という一文は、感動の淵源が小説ではなく、べつの所にあったことを紛れもなく示しているのだから。

＊

もちろんヴァレリーにとって『ルーヴェン』が特権的な小説であることに変わりないし、そのことはジッドも早くから充分に承知していた。序文が活字になる30年前、1897年にふたりが交わした数通の書簡には、同作に対する前者の嘘偽りのない心酔が窺い知れる。まずジッドが4月16日の消印が打たれた手紙で、「『リュシアン・ルーヴェン』と『ある旅行者の手記』はというと、僕はすっかりスタンダールに夢中になってしまった——あるいはスタンダールが僕を捕らえたのだ」と切り出したものの、「『リュシアン・ルーヴェン』が、『赤と黒』もしくは『パルムの僧院』にくらべて少々面白くないのは、それが描き出す人物たち、つまり僕があまり理解できない政治的意見に左右される人間たちが、相変わらず自分にとっては、動かせる範囲がよく分からない、チェスの駒

みたいだからだ」¹⁵⁾と不満を述べると、すかさずヴァレリーは返信で次のように反駁する――

僕の大好きな『リュシアン・ルーヴェン』について称賛以外のことを――あのルイスみたいに――述べることを君に禁じる。僕はド・スタンダール氏が好きだ。なぜなら彼は、自分自身に話すように書くからだ――つまり僕がよく僕自身に向かって話すようにね。それに彼はきわめて思慮深くもある。

しかも彼は、恋を扱って僕に我慢できる文章を書く、ほぼ唯一の作家だ。ベール以外の作家が描く恋愛は、僕にとって耐え難い。ベール自身においては、何ものも恋にくらべては優っておらず、そしてこの点については、ド・シャストレル夫人との恋より秀でたものは何もない。これは完璧だ。まさに我が胃袋に不可欠な、心と肉体を絶妙に混ぜ合わせてできた一品（省略表現）。

他の小説家の作品では、恋の二重奏は粗雑だ。つまりあらかじめ分かりきった、ありふれたものか、あるいは（ここはユビュの声で）俺にはどうでもいい、きわめつけの美文で出来上がっている。

『赤と黒』にくらべたら『リュシアン・ルーヴェン』はそれほど下卑ていない。こちらのほうが僕は好きだ。それに、あの素晴らしいルーヴェンの父親――バルザックでさえも創り出せなかった人物――がいる。¹⁶⁾

『ルーヴェン』を擁護するヴァレリーの有無を言わせぬ語調にジッドは少なからず驚き、刮目して作品に向き合ったのだろうか。彼は同月 27 日付の返信を、「すばらしいお手紙、ありがとう。僕は『リュシアン・ルーヴェン』に喰い尽くされている。『リュシアン・ルーヴェン』は類い希なる一書だ。これにとって傑作という言葉は愚かしく響くだろう」と絶賛で始めている。だがジッドが、「なんとという誠実さ！美辞麗句がない――あるいは練り上げられた文も。もはや人々は〈文芸〉や辟易させるあのシャトーブリ안의思い出がどのようなものであったか分かるまい。技巧がないのだ。すべては即座の適切な思いつきから成っている」¹⁷⁾と続けるとき、先のヴァレリーの手紙とは論点が微妙にずれている。後者が強調していたのは作家の文体や技法上の特色以上に、『ルーヴェン』の描く恋愛、つまり恋の表象における独自の魅力だからだ。

この点についてヴァレリーの関心は一貫している。ピエール・ルイスに宛てた書簡（1898 年 12 月 17 日付の消印）でも、「ご存じのように、これ〔ワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』〕と『リュシアン・ルーヴェン』は、僕の鑑賞に堪え、作中に描かれた恋が好ましく思える、ただふたつの作品だ」と表明し

ているように¹⁸⁾、この小説をめぐる彼の関心は恋愛というモチーフを離れることはない。しかも友人たちばかりでなく、自らに対してもヴァレリーは1931年にこう書いている——「自分以外の人々による恋物語の数々——それらは私を退屈させる。『ウェルテル』を読むのは不可能だ。例外：『ルーヴェン』」¹⁹⁾。序文においてヴァレリーが特筆する小説の美質もまた、主人公たちの恋のありようであったことを思い起こそう。『ルーヴェン』のうちヴァレリーを惹きつけたのは、7月王政下のフランス社会に対する諷刺でも、ましてやそれらから抽出される作家の政治観でもなかったのである。

ヴァレリーは早くからスタンダールの愛読者だったが²⁰⁾、心酔しきっていたわけではない。20代後半には読み方が批判的になり、その評価は両義的になっていた。たとえば、アンリ・ド・レニエは1897年にヴァレリーの次の言葉を書き留めている——「スタンダールを蔑むために僕は準備万端だったが、しかし出来なかった」²¹⁾。こうしたアンビバレンスや小説ジャンルに対する消極的見解にもかかわらず、『ルーヴェン』が——『赤と黒』でも『バルムの僧院』でもなく——ヴァレリーにとって特別な位置を占め続けたのは、この作品だけが彼の感情や感受性に強く働きかける特殊な性格を備えていたからであろう。2年後、彼は手紙で友人アンドレ・フォンテーナスにこう打ち明けている——「慰め：僕は『ルーヴェン』を読み返している。要するに、驚嘆すべきものであり、僕が自分自身の感情を再び見いだす、そういう苦く楽しい本」²²⁾。

なぜ『ルーヴェン』の描く恋の世界が小説嫌いのヴァレリーの心をかくも捉えてしまったのか。この問題に対する先行研究の関心は総じて薄い。これまでのところでは、たとえばヴァレリーがシャストレル夫人の人物描写に魅了された理由として、その名前が「バチルド」だったこと、つまり彼がパリに定住する1894年に知り合った女曲馬師バチルド・モンシミエのプレノンと同一であった点が示唆されている²³⁾。確かに名前の一致は看過できないが、物語と現実のそれぞれの恋愛——プラトニックな恋と性愛の悦びにもとづくそれ——を照らし合わせるならば²⁴⁾、別の視点から考察する余地がまだ残されているように思われる。

序文にあるように、『ルーヴェン』がヴァレリーに「作者が技巧の限りを尽くして描き出す感情」と「自分自身の感情」との区別がつかなくなる状態、自と他の識別が困難になる状況をもたらしたのだとすれば、それはおそらく彼の文

学の根幹にかかわる事態ではなかったか。もちろん何事においても厳密に見極めようとする、詩人の知的性向に反するからだけではない。初期のソネット「ナルシス語る」から白鳥の歌となった「天使」にいたるまで、ヴァレリーの文学的な営みは、清水徹の言う「内省意識への注視、意識の二重化作用、自己の純粹性と完璧生の追求といった、意識ないし自己認識をめぐる問題系の展開と深化と再編成」²⁵⁾を核とするのであれば、自己とは他なるものとの境界を見定めることのできない状態、言葉を換えるなら、自己の輪郭を見失う状態とは、ヴァレリーにとって少なからず深刻な不能の体験と言えるだろう。「私の忌み嫌う混淆」という詩人の言葉は、まずはそういった意味で理解すべきである。

むろん問うべきことは、これに尽きるわけではない。『ルーヴェン』の描き出す世界においてヴァレリーが「自分自身の感情」と相同の感情に遭遇したのであれば、彼はそこに己の「心」の鏡像を認めたという謂にもなろう。つまりこの出来事是一个のナルシス的な体験とも位置づけられるはずである。小説が彼自身の忌み嫌う混淆を「奇跡的にも」引き起こしたというヴァレリーの述懐は、鏡像によって彼が眩暈を覚えつつ幻惑、魅了されたことを物語っており、したがってその様相を、感情と認識の次元で交錯する自と他の一致と対立という両面的経験として捉えることもできるのではないか。ヴァレリーの想像世界が〈ナルシス〉という主題系を成す基本的な構造と拡がりをもつのであれば、『ルーヴェン』の読書経験はその圏域のなかでいかなる意味をもつのかという問いは、とうぜん検討されてしかるべきである。

＊

『ルーヴェン』のもたらした幻惑と喜悦の要因が、テキストの世界だけでは説明できないことは、「これらの名状しがたい美点に心を深く動かされる、私なりの理由があったのだろう」と書くヴァレリー自身が最もよく分かっていたに違いない。彼は晩年、『カイエ』に次のように認めている――

不眠。今夜、『ラシーヌとシェイクスピア』を断片的に読んだ。ここかしこに、なかなか良いことが書かれている。註に『L〔リュシアン〕・ルーヴェン』の名が引かれているので、私は〔18〕91-92年の恋による深刻な心の病のことを思い出す――数年後、ミティが94年にくれた『ルーヴェン』が、あの明晰このうえなかった時期に、ルー

ヴェンとシャストレールの恋を様々に描くその並外れた繊細さによって、どれほど我が心を動かしたかを思い起こしながら。恋の感情が本質的にもつ強度を軽妙に描き出す点でこれと比肩しうるものは、いかなる文学においてもないと確信する。バルザックにおいても皆無だ。私がこれに完璧に反響していたのは確かである。²⁶⁾

1940年8月に書きとめられたこのレミニサンスは、『ルーヴェン』の序文での告白を裏付ける内容だが、それ以上に重要なのは、シャンピオン版『ラシーヌとシェイクスピア』の註で触れられた小説の題名が²⁷⁾、「91-92年の恋による深刻な心の病」の記憶、すなわちヴァレリーの精神的・文学的な軌跡を語るうえで不可欠な青年期の重大事件の想い出を甦らせた点であろう。恋の相手となったのは、備忘の数行先で「Mme de Rov.」と略記されるロヴィラ夫人であり、今井勉がここに彼女とシャストレール夫人との関連性を認めたように²⁸⁾、文面には実生活の出来事と虚構の世界とを結びつける連想の太い糸が確かに示されている。ただし恋と読書との間に2年ほどの隔たりがあり、何かしらの現実的な接点が考えにくいからには、「恋による深刻な心の病」と読書による感動とが、このように意図せず不可分に想起される理由は、詩人の想像的な領域における両者の照応関係にあるとまずは考えてさしつかえあるまい。いずれにせよ、ヴァレリーが序文では暗示するにとどめた、小説に心を動かされた「私なりの理由」とは、彼が夫人に抱いた若き日の恋慕を指すはずである。

シルヴィア・ド・ロヴィラ男爵夫人——彼女をめぐる一件とその重要性は、もちろんヴァレリー研究者には既知のことであろうが、我々スタンダリアンにとってはその名前すらほとんど馴染みがないと思われるので、手短に概要を記そう²⁹⁾。ヴァレリーが夫人に結晶作用を起こすにいたったのは、1889年7月8日、モンペリエ郊外のバラヴァスからの帰途で、列車に乗り合わせたのがきっかけとされる³⁰⁾。彼女は当時、ふたりの子を持つ未亡人であり、年齢は30代半ばを過ぎていた。言葉を交わすことなく別れたものの、この母親ほども年の離れた貴婦人に対する思いは募ってやまず、やがて青年は恋心を打ち明けることもできぬまま、彼女への愛欲に苦悩することになる。こうした過去をヴァレリーは、前掲の『カイエ』の後続箇所で次のように振り返っている——「そしてこの夜、(私にしてはきわめて稀なことだが)わが想い出の数々を見いだす——ド・ロヴ〔イラ〕夫人。ただの一度も話しかけたことのないこの女性について想像を膨らませながら、私は狂ったようになってしまい、数年にわたっ

て恐ろしく不幸であった！ こういったこと（これや、もっと最近のほかの恋）を題材にして文学作品をつくることなど、私には絶対にできない。私にとって文〔学〕とは、愛情や嫉妬心から想像力の産みだす毒に抗う手段である」³¹⁾。たまさか遭遇してもただ見つめるよりほかないロヴィラ夫人の存在は、やがてヴァレリーの想像世界のなかで偶像と化すのだが、ミシェル・ジャルティによれば、それは理想化された、到達できない純潔な形象として夢想されるばかりでなく、同時に肉欲の対象ともなって現前するような二面性を有する偶像にはかならず、そのイメージは次第に彼の心に執拗につきまとい離れなくなり、かくて「ナルシス」の若き作者にとって官能的な瞑想は死へと導くヴィジョンへと反転し、「伯爵夫人さん」は「メドゥーサ」に姿を変じたのだという³²⁾。

この恋の懊悩は、おそらくは1894年まで続いたとされる精神の深刻きわまる危機的状況³³⁾——1892年10月の〈ジェノヴァの夜〉を含む時期——の要因に数えられ、ヴァレリーの文学的生涯を見晴らすうえで看過できない第一義的な重要性をもつ。彼が耐えたエロスの惑乱のありようは、フランス国立図書館の所蔵する「R夫人関連資料」や友人等への書簡に窺えるが、『ルーヴェン』の読書との関係で注目すべき側面は、これらの資料と初期詩篇との間に認められる緊密な関連性であろう。清水徹はヴァレリーのエクリチュールの生成を捉える際、「R夫人関連資料」について、「奇妙な恋情にはじまる内的危機を発条とした、エクリチュールの地平における波瀾以外の何ものでも」なく、「若いヴァレリーの想像界との関係においてそれらを作品と区別するいかなる理由もない」として、「これらの草稿類と〈ナルシス〉系列作品とのあいだに感知しうる関連の網の目」を注視している³⁴⁾。清水の考えるように、「R夫人関連資料」にはヴァレリーにおける「エクリチュールの生成がきわめて凝縮したかたちで示されている」のだとすれば³⁵⁾、それはロヴィラ夫人に対する異様な恋が現実根ざすところがきわめて少なく、あくまでヴァレリーの想像界のなかで行われた「一人小説」³⁶⁾、あるいは今井勉の解するような「想像恋愛」³⁷⁾だったからであろう。恒川邦夫によれば、そこに見られるメモや草案は「徹底した自意識の分析」ないしは「仮構世界のデッサン」からなるという³⁸⁾。

したがって、『ルーヴェン』への感動、つまりフィクションの世界への没入というヴァレリーにあっては異例の経験が、ロヴィラ夫人の存在をただちに喚起する所以を探る目的で、夫人の現実的、伝記的な事象と小説テキストとを照合

する作業はまったく無意味と言えよう。かかる謎を明るみに出すには、むしろ若き日の彼のイマジネールの次元において問題を検討する必要がある。「R夫人関連資料」はむしろのこと、これに想像力のシステムやイメージ等の連関によって密接に呼応する作品群、すなわち〈ナルシス〉という神話的形象を主題とする初期の詩篇や草案——1890年9月28日付の「ナルシス語る」と題されたソネ2篇、これらの改変版である1891年3月『ラ・コンク』誌掲載の同題名の一篇、さらには後者を交響楽的な形式の作品につくりかえる1890年から1894年にかけての一連の試み³⁹⁾——こそ、ヴァレリーによる『ルーヴェン』の読書が彼の想像界でもちえた意義、すなわち「私がこれに完璧に反響していたのは確かである。Il est vrai que je résonnais merveilleusement à cela.」という言葉の意味を探るうえで重要な糸口となるはずである。

＊

ところで、ヴァレリーは『ルーヴェン』を読んだ時期を、その序文でも、前掲した1940年8月付の『カイエ』の覚書でも1894年としているが、しかしこれについては確証が得られていない。たとえばミシェル・ジャルティは、近年刊行した伝記や校訂版のなかで小説の読書を1897年としている⁴⁰⁾。訂正の理由は挙げられていないので推測するしかないが、おそらく資料の現状において詩人自身による『ルーヴェン』への言及が、同年4月19日の消印が押されたジッド宛書簡より以前に遡っては確認できないためであろう。そしてまた序文には、こうも書かれているからではないだろうか——「それ〔『ルーヴェン』〕がダンテュ書店から刊行されるやいなや、彼〔ジャン・ド・ミティ〕は忘れずに一冊送ってくれた。その本がまさに無上の喜びをもたらしたのである。私は同書を繙いた最初の読者のひとりとなり、そこそこで本を称賛したのであった」(傍点強調は引用者)⁴¹⁾。この述懐の通りであれば、スタンダールの良き理解者とは言いがたいルイスは別にしても⁴²⁾、当時親しく交わっていたジッドとの文通で小説が話題にのぼるのが97年になってからという事実をどう解せばいいのか。ジャルティによる推定の根拠は、思うにこれらを勘案したところにあるのだろう。

1894年か、それとも97年か。管見の及ぶ限りでは、この問題はあまり検討

されていないようだが、90年代は詩人の精神的・文学的な軌跡が大きな振幅を見せた重要な時期だけに、どちらの年とするのかによって読書体験の捉え方は少なからず変わってこよう。それゆえここでは慎重を期して、94年と記したヴァレリーの証言を検証しておきたい。

まずジャン・ド・ミティが『ルーヴェン』をダンテュ書店から刊行した時期については⁴³⁾、フランス国立図書館発行の『フランス書誌』に記載がなく、限られた手がかりに拠って推し量るしかない。本の奥付には、ポール・デュボン印刷所で1894年1月5日に刷られたことが記されているが⁴⁴⁾、むしろ実際の頒布は刷了よりも後になる。ミティ関連の一次資料では、同年6月10日付のスポールベルク・ド・ロヴァンジュール宛の書簡に言及があり、『ルーヴェン』を自分自身の手で子爵に直接渡したかった旨が記されている⁴⁵⁾。また、当時の新聞や雑誌などに目を向けると⁴⁶⁾、最も若い日付をもつ関連記事は94年4月22日の『ゴーロワ』紙であり、「スタンダールの新しい小説」と題した欄で「ようやく若き作家ジャン・ド・ミティ氏の登場である。彼はスタンダールの未刊の小説『リュシアン・ルーヴェン』を間もなく出版する」と近刊を予告している⁴⁷⁾。この記事に続いたのは、5月4日の『ル・ジュルナル』紙に掲載されたモーリス・バレスの短評である。そのなかでバレスは、グルノーブルの図書館に眠っていた草稿にもとづき『ルーヴェン』を上梓したミティの仕事を好意的に紹介しているが、『ゴーロワ』紙の記事との関連で注目すべきは、「このスタンダールによる一書が、また新たに出版されたばかりである」という書き出しであろう⁴⁸⁾。これらの情報を突き合わせるならば、小説が書店に並んだのは、1894年4月22日から5月4日にかけての期間であったと推定できる。

次にふたりの関係に目を向けると、資料としては『ルーヴェン』の序文でのヴァレリーの追憶があるだけである——「私たちはステファヌ・マラルメの家で出会った。そこに彼〔ミティ〕は毎週火曜日によく顔を出していたのである。この得難い夕べが散会すると、私たちは度々ふたりして雑談しながら、仄暗いローマ街を通して煌々たるパリの中心へ足を向け、道すがら好んでナポレオンやスタンダールのことを話題にしたのだった」⁴⁹⁾。この記述に従うなら、彼らが知り合ったのはマラルメの火曜会だったのだろう。ヴァレリーが初めて出席したのは1891年10月10日とされるが⁵⁰⁾、92年の冬に始まるパリ滞在の折りにはジッドやルイスを伴い度々ローマ街を訪れているので、1894年3月にパリ

のゲイ＝リュサック街に居を定めた頃にはヴァレリーはすでに火曜会の常連だったと思われる⁵¹⁾。他方、ミティの上京は80年代と考えられているものの⁵²⁾、マラルメの知遇をえた時期については未詳である。ミティは1894年1月2日に新年の挨拶状——この短信で彼はマラルメに「Maitre」という敬称を用いている——を詩人に送っているので、94年までには詩人を囲む夕べに加わっていたのではないだろうか⁵³⁾。

1894年中の火曜会の開催状況に目を向けると、マラルメがロンドンから帰国した3月16日以降では、5月15日の会が急遽中止となり、その後は一家での長期にわたるヴァルヴァン逗留のため、10月22日まで催されていない⁵⁴⁾。しかしヴァレリーのパリ定住後、『ルーヴェン』の刊行に接する時期、つまり94年3月20日から5月8日までの期間に限れば、火曜会は開かれていたのであって、彼がそこでミティと顔を会わせていた蓋然性は必ずしも否定できない。『ルーヴェン』の序文でヴァレリーは、マラルメ宅からの帰途、ナポレオンやスタンダールについてミティと話しに花を咲かせたと述べているが、たとえば5月8日の火曜会でナポレオンが話題に挙がっている事実は⁵⁵⁾、彼の証言に重みをあたえよう。さらにミティとの関連では、当時ヴァレリーがナポレオンをレオナルド・ダ・ヴィンチの双生児的な存在として重視し⁵⁶⁾、前者に特別な関心を抱いていたことも無視できない。というのも、ミティは未定稿『ルーヴェン』を出版しただけでなく、同じくグルノーブルの図書館で転写した、ナポレオンに関するスタンダールの草稿を出版しようと準備しており、ヴァレリーの興味をかき立てる話題に事欠かなかったはずだからである。ミティにしても自らが敬愛してやまないスタンダールを愛読する10歳ほど年下の若者——この時代、彼らはまだ「幸福な少数者」であった⁵⁷⁾——と出会い、たちまち親近感を覚えたに相違ない。そう考えるならば、「それ〔『ルーヴェン』〕がダンテ書店から刊行されるやいなや、彼〔ミティ〕は忘れずに一冊送ってくれた」というヴァレリーの回想には確かな真実味が感じられるのではあるまいか。

他方、ヴァレリーと『ルーヴェン』の出会いを1897年と仮定すると、状況からはその理由がはっきりと見えてこない。詩人がミティとこの年に知り合ったとは考えられず、小説の出版からは2年以上が経過していてすでに話題性はなくなっており、ヴァレリーがわざわざ「そこここで本を称賛」する必要はもうないはずである。あるいはまた、94年に受けとった小説をヴァレリーが3年後

に読んだと見なすことも、彼のスタンダールに対する関心が高かった時期だけに説得力に欠ける。むしろ問題は、なぜ97年になって『ルーヴェン』がジッドとの間で話題になったのかという点に存するのではないか。

小説の発刊時期に照らしてヴァレリーの回想を読み直すなら、小説の落掌は1894年5月初旬から6月5日までの間であったと推測されるが⁵⁸⁾、実際にはこの時期、彼がスタンダールの新刊についてジッドと言葉を交わすことはありえなかった。クロード・マルタンの考証によれば、ジッドは前年の10月6日にパリを発ち、ほぼ9カ月半にわたってチュニジア、アルジェリア、イタリアを巡り、帰国したのは94年7月24日だったからである⁵⁹⁾。ヴァレリーは、「私は同書を繙いた最初の読者のひとりとなり、そこここで本を称賛したのだった」と記しているが、そうした場にジッドが居合わせることはなかったことになる。1897年になって初めてふたりの文通に『ルーヴェン』が登場したのは、ジッドが同年4月初旬にイタリアへと旅立つ直前、彼らの間で偶々この小説が話題に上がり、友人が未読だったことに驚いたヴァレリーが手元の一冊を貸し与えた⁶⁰⁾、というのが事の真相ではないだろうか。刊行からおよそ3年後に『ルーヴェン』が両者の文通で大きなトピックとなった理由は、ヴァレリーではなく、ジッドの側にあったと考えることもできよう。

このように見てくると、1894年に『ルーヴェン』を読んだとするヴァレリーの記憶が誤っているとは必ずしも言えまい。いやむしろこの証言をそのまま受けとるほうが、小説の世界とロヴィラ夫人とが彼の想像的な領域において交差し、重なり合った文脈も見えてくるのではないだろうか。なぜなら同年の秋、かの『カイエ』の執筆が始まったように⁶¹⁾、94年はヴァレリーの精神史においてひとつの節目を成しており、彼の抱く夫人のイメージにもある変化が認められるからである。

*

この年、ヴァレリーは『カイエ』に先駆けて一冊のデッサン帖に様々な備忘や数式、素描などを書き残している。『ロンドン手帖』と呼ばれるそれは、執筆期間がロンドン逗留を含む5カ月間をカバーしており⁶²⁾、興味深いことに我々の推測する『ルーヴェン』の落掌時期と重なっているばかりか、表紙の裏には

ロヴィラ夫人の横顔が描かれているのである⁶³⁾。この肖像をめぐっては、1894年当時はまだ彼女の面影がヴァレリーの精神に憑きまどっていたとし、デッサンをその呪縛から解放されるための最後の苦闘^{しるし}の徴とする見方がある一方で⁶⁴⁾、夫人のために彼が味わった心の痛手の数々はバリ定住時にはすでに念頭を去っていたとする説もあって⁶⁵⁾、慎重な検討を要するが、しかし夫人の存在がもはや希薄になっていた時期にもかかわらず、なぜ突然ヴァレリーは彼女の横顔を手帖に素描したのか、と問うことは許されよう。あるいは、何が機縁となってロヴィラ夫人の面影は思い描かれるにいたったのか。

ここで1940年8月の『カイエ』の覚書を振り返る必要がある——「註に『L [リュシアン]・ルーヴェン』の名が引かれているので、私は〔18〕91-92年の恋による深刻な心の病のことを思い出す——数年後、ミティが94年にくれた『ルーヴェン』が、あの明晰このうえなかった時期に、ルーヴェンとシャストレールの恋を様々に描くその並外れた繊細さによって、どれほど我が心を動かしただかを思い起こしながら」。偶然目に止めた小説のタイトルがロヴィラ夫人への恋を想起させたという事態はどういふ通常のことではありえず、両者の間に緊密な連想のつながりが形成されている事実を確かに示していよう。しかも題名が追憶のきっかけとなって終わったのではない。「深刻な恋の病」と読書による感動は、あたかも糸を縫い合わせるかのように、あるいは記憶のなかで木霊するかのように追想されているのである。この強固な呼応関係は、他のヴァレリーの言辞——感動の「私なりの理由」、小説への「私」の完璧な「反響」、小説に「自分自身の感情を再び見いだす」など——にも窺えようが、その成立の起源を問えば、やはり彼をして直ちに再読させたという最初の読書に遡るのではないか。1894年に『ルーヴェン』に遭遇したヴァレリーの脳裡で不幸な恋の記憶が突如湧出し、ロヴィラ夫人の心象は小説の世界と分かち難く結びついたと考えて間違いあるまい。

もちろんヴァレリーが『ルーヴェン』に見いだしたのは現実の恋の再現ではありえず、スタンダールの言葉を借りるなら、「美しい嘘」の次元に移調された彼の「想像恋愛」であろう。そこにおいてロヴィラ夫人のイメージは女主人公シャストレール夫人の繊細かつ純潔な形象と渾然一体となり、新たな魅力に伴い甦ったのではなかったか。そうだとすれば、『ロンドン手帖』に素描されたロヴィラ夫人の肖像は、1894年におけるヴァレリーの『ルーヴェン』との邂逅、

そしてそれが彼の想像界にもたらした反響の痕跡と考えることもできるのである。手帖に残された夫人のデッサンには、そう理解することを妨げないいくつかの特徴が見いだせる。

「R夫人関連資料」に散見する夫人のデッサンと『ロンドン手帖』の肖像とを綿密に比較し、相違点を指摘した松田浩則は、後者におけるヴァレリーの意図を「自らの記憶に基づきつつ、いかに彼女の端正な顔立ちを再現できるかどうかにあった」とし、横顔の素描を「一種の知的練習問題」であると位置づけ、その根拠として手帖全体から〈ジェノヴァの夜〉以降、ヴァレリーが精力的に科学関連の書籍を読んだことによる知的興奮⁶⁶⁾が伝わってくることを挙げている。この解釈は、『ロンドン手帖』の肖像に『ルーヴェン』の反映を見る我々の立場と必ずしも齟齬をきたすわけではない。なぜなら、そういった当時のヴァレリーの知的状態を、小説の読書状況に関する彼自身の言葉——「あの明晰このうえなかつた時期に *dans cette période extra-lucide*」——に照らすならば、読書とデッサンとの年代学的な符合が裏づけられるからである。

また松田の論考は、「R夫人関連資料」において「ツタ、石炭、糸状の黒ダイヤモンド」に喩えられ、「いつも濡れている」と形容されていたロヴィラ夫人の髪の毛が、『ロンドン手帖』のデッサンではきちんと整えられている点を顕著な相違として挙げているが⁶⁷⁾、この指摘がきわめて意義深いのも、それが示唆するのが、以前の夫人のイメージに認められた「メドゥーサの属性」⁶⁸⁾の脱色化であるからにはかならない。1894年当時、もはや彼女の存在は、かつてのようにヴァレリーに執拗に迫り、苦しめた魔物的なものとは一変しているのは確かであろう⁶⁹⁾。

同様の変容は、ロヴィラ夫人の「眼差し」にも認められる。「恋文草稿」を中心に「R夫人関連資料」につぶさにあたった今井勉は、資料全体において時にメドゥーサの形象をとる夫人の眼差しが「恋文草稿」の修正過程を通じて排除されてしまう点に着目し、その考察から彼女の眼や視線が当時のヴァレリーにとって強迫性を帯びていたという解釈を導き出している⁷⁰⁾。他方、『ロンドン手帖』に描かれた横顔では、眼差しのそうした性格が影を潜めるのはもちろんのこと、「R夫人関連資料」での夫人の容貌を特徴づけていた目元の笑みもまた、我々の見るところ認められない⁷¹⁾。「恋文草稿」では微笑が眼差しと対になっていた点を踏まえるならば、両者は相まってメドゥーサの属性を成してい

たとえられ、『ロンドン手帖』の肖像におけるその消去はやはり同じ変容のベクトルを示していると解することができる。

さらに注目すべき細部の変化は、目尻の皺の有無である。「R夫人関連資料」では素描であるにもかかわらず、ロヴィラ夫人のどの肖像にも描かれていた目元の皺が、『ロンドン手帖』では見当たらない。その結果、後者の夫人の横顔は、前者に登場する彼女のいずれの素描に比べても若々しく見える。このことが意味するのは、『ロンドン手帖』の肖像が、メドゥーサ的な属性こそ失っているものの、しかし偶像としての原点に立ち返って思い描かれたのではないという内実ではないだろうか。そうであれば、ヴァレリーの脳裡でロヴィラ夫人の存在がより若い女性へと変貌を遂げる誘因として、やはり『ルーヴェン』の読書の影響を挙げるのはあながち的外れとは言えず、『ロンドン手帖』の素描に彼女と女主人公シャストレール夫人との想像的な領域での融合の反映を見ることができよう。ただしそう積極的に考える理由は、小説の設定では後者が26歳の未亡人となっているためだけではない。ヴァレリーにあってイメージの生成が呼応するのは、なによりもイマジネールの次元だからである。詩人自ら「恋文草稿」に記した「私の想像力はあなたを刻々と再創造したいのです」という一文に看取されるように、ヴァレリーによる「ロヴィラ体験」とは「徹底した〈想像力〉のドラマ」⁷²⁾であるのなら、その想像力が「完璧に反響」した小説の「ドラマ」との間にイメージや意味作用の新たな関連の網の目を形成し、夫人の形象をそれまでとは異なる姿で再生させたとしてもけっして不思議ではないように思われる。

結 語

1897年7月5日消印のジッド宛書簡や⁷³⁾、前掲したフォンテーナス宛書簡に記されたヴァレリーによる『ルーヴェン』の再読を、「ロヴィラ＝シャストレール」という文脈において捉えなおすとすれば、前者への不幸な恋を自ずと想起させる小説を、時に心の「慰め」として読むことができたのも、抗し難いメドゥーサ的な魅力にもはや惑乱されることなく、「ド・シャストレール夫人の人物描写における並みはずれた繊細さ」を介してロヴィラ夫人の面影を透かし見る、甘美でもあり苦くもある悦びに我を忘れて浸りえたからではないだろうか。

その意味では、ヴァレリーにとって『ルーヴェン』の再読とは、恋の追想と少しも異ならなかったのであろう。この芸術による昇華の影で、実生活における彼の肉欲の悦楽を引き受けたもうひとりのパチルドの役割についても我々の興味は尽きないのだが、小説を自らの「想像恋愛」の鏡としたヴァレリーに固有の深く鋭角な読みをアリアドネの糸として、『ルーヴェン』の世界に分け入る可能性を最後に提起しつつ、ここで本稿は擱筆としたい。

註

- *）本稿は「JSPS 科研費：課題番号 16K02537」の助成を受けた研究の一部である。
- 1) Voir Michel JARRETY, « Notice de *Stendhal* », in Paul VALÉRY, *Œuvres*. Édition, présentation et notes de M. JARRETY, 3 vol., Paris : Librairie Générale Française, coll. « Le Livre de Poche », 2016, t. I, p. 1131.
- 2) André GIDE, *Journal II (1926-1950)*. Édition établie, présentée et annotée par Martine SAGAERT, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1997, p. 71. 以下、訳出引用は、特に記さない限り拙訳による。
- 3) *Ibid.*, p. 1176.
- 4) *Ibid.*, p. 71.
- 5) VALÉRY, « Variation sur une *pensée* », in *Œuvres, op. cit.*, t. I, p. 797. 引用には次の邦訳を使用している——ポール・ヴァレリー『ヴァレリー集成Ⅳ 精神の〈哲学〉』（山田広昭編訳）、筑摩書房、2011年、89頁。なお、ヴァレリーによる批判の妥当性については次を参照——山上浩嗣『パスカル『パンセ』を楽しむ』、講談社学術文庫、2016年、203-208頁。
- 6) Paul VALÉRY, « Au sujet de Stendhal. À propos de *Leuven* », in *Lucien Leuven*, Texte établi et annoté avec un avant-propos par Henri DEBRAYE. Préface de P. VALÉRY, 4 vol. [in *Œuvres complètes* de STENDHAL, publiées sous la direction d'Édouard CHAMPION et de Paul ARBELET, 33 vol., Paris : Libr. Honoré Champion, 1913-1934], t. I, [1927], p. XV.
- 7) *Ibid.*, pp. XXIX-XXX.
- 8) *Idem.*
- 9) *Ibid.*, p. III.
- 10) André BRETON, *Œuvres complètes I*. Édition établie par Marguerite BONNET, avec, pour ce volume, la collaboration de Philippe BERNIER, Étienne-Alain HUBERT et José PIERRE, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1988, pp. 313-314.

- 11) 中野知律『プルーストと創造の時間』, 名古屋大学出版会, 2013 年, 1-31 頁を参照。
- 12) Voir Michel RAIMOND, *La crise du roman. Des lendemains du Naturalisme aux années vingt*, Paris : Libr. José Corti, 1966, pp. 115-118.
- 13) VALÉRY, «Au sujet de Stendhal. À propos de *Leuwen*», *op. cit.*, p. III.
- 14) Voir Michel JARRETY, *Paul Valéry*, Paris : Fayard, 2008, pp. 67-68. 両者の関係については次も参照——吉井亮雄「ジッド」(「ヴァレリー・キーワード 10」のうち), 『現代詩手帖』(特集「ヴァレリーの新世紀 没後 60 年」), 思潮社, 2005 年 10 月, 140-141 頁; 鳥山定嗣「ジッドとヴァレリーの詩をめぐる交流——初期の友情を中心に——」, 九州大学フランス語フランス文学研究会『ステラ』第 34 号, 2015 年 12 月, 289-290 頁。
- 15) André GIDE, Paul VALÉRY, *Correspondance 1890-1942*. Nouvelle édition établie, présentée et annotée par Peter FAWCETT, Paris : Gallimard, coll. «Les Cahiers de la NRF», 2009, pp. 429-430.
- 16) *Ibid.*, p. 432.
- 17) *Ibid.*, pp. 435-436.
- 18) André GIDE, Pierre LOUÏS, Paul VALÉRY, *Correspondances à trois voix 1888-1920*. Édition établie et annotée par Peter FAWCETT et Pascal MERCIER, Paris : Gallimard, 2004, p. 874.
- 19) Paul VALÉRY, *Cahiers*. Édition établie, présentée et annotée par Judith ROBINSON, 2 vol., Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1973-74, t. II, p. 1220.
- 20) Voir JARRETY, «Notice de *Stendhal*», in VALÉRY, *Œuvres*, *op. cit.*, p. 1131.
- 21) Henri de RÉGNIER, *Les Cahiers inédits 1887-1936*. Édition établie par David J. NIEDERAUER et François BROCHE. Présentation, chronologie et notes de F. BROCHE, Paris : Pygmalion / Gérard Watelet, 2002, p. 439. スタンダールについてのヴァレリーの両面的な見解は, 1901 年 6 月 23 日付ジッド宛書簡にも認められる——「スタンダールも彼自身がほとんど操り人形と化している。そうは言っても, 僕はスタンダールが好きだし, 彼には, 〈我が読みに抗しない歯応えのないものなど, 私にとって何だというのか〉などと言うことはまずないだろう」(GIDE, VALÉRY, *Correspondance 1890-1942*, *op. cit.*, p. 597)。
- 22) Paul VALÉRY, André FONTAINAS, *Correspondance 1893-1945. Narcisse au monument*. Édition, introduction et notes établies par Anna LO GIUDICE, avec «Entrée au Monument» par Leonardo CLERICI, Paris : Éd. du Félin, 2002, p. 142.
- 23) Voir JARRETY, *Paul Valéry*, *op. cit.*, pp. 142, 143 et 224. なお, パチルドとの関係は翌年 11 月に解消したようである (voir Paul VALÉRY, *Cahiers 1894-1914*. Édition intégrale établie, présentée et annotée sous la co-responsabilité de Nicole CELEYRETTE-PIETRI et Judith ROBINSON-VALÉRY, 13 vol., Paris : Gallimard, 1987-2016, t. I, pp. 46 et 433)。
- 24) 清水徹『ヴァレリー——知性と感性の相克』, 岩波新書, 2010 年, 34-35 頁を参照。

- 25) 清水徹『ヴァレリーの肖像』, 筑摩書房, 2004 年, 10-11 頁。
- 26) VALÉRY, *Cahiers, op. cit.*, t. II, p. 534.
- 27) この時、ヴァレリーが読んだ『ラシーヌとシェイクスピア』の注釈版は、1894 年刊行のミティ版『ルーヴェン』以後、1940 年 8 月までに出版された版であろう。適合するのは 1925 年のシャンピオン版と 28 年のディヴァン版だが、註で『ルーヴェン』に言及があるのは前者だけである。2 箇所の註が該当するが、いずれにおいても小説本文の引用はなく、題名のみを挙げて関連事項の解説がされている——ひとつは『ルーヴェン』の別題名のひとつに、本文で言及されているファール・デグランティヌの喜劇『マルタ島のオレンジ』と同名のものがあるというもの。他方は、本文の一節が『ルーヴェン』を想起させずにはおかぬというもの。したがって、ロヴィラ夫人の想い出がヴァレリーの脳裡に甦る触媒となったのは、『ルーヴェン』のタイトルだったと考えることができる。このことを踏まえて引用箇所の訳出を行った。なお、どちらの註が回想の契機となったのかは、内容からは判断しがたい。Voir Pierre MARTINO, «Notes et éclaircissements», in *Racine et Shakespeare*, Texte établi et annoté avec préface et avant-propos par P. MARTINO, 2 vol., in *Œuvres complètes de STENDHAL, op. cit.*, t. I, [1925], pp. 183, 184 et 227.
- 28) Tsutomu IMAI, «Lettre d'amour dans un tiroir», in *Paul Valéry en ses miroirs intimes*, Paris: Éd. Fata Morgana, 2014, p. 54.
- 29) ロヴィラ夫人については、清水前掲 2 書以外に次を参照した——松田浩則「ヴァレリー、あるいはロヴィラ夫人の変貌」, 『神戸大学文学部紀要・五十周年記念論集』第 27 号, 2000 年 3 月, 455-484 頁; 恒川邦夫, 今井勉, 塚本昌則「フランス国立図書館所蔵『ド・ロヴィラ夫人関連資料』——解説と翻訳の試み——[翻訳篇(上)]」, 日本ヴァレリー研究センター『ヴァレリー研究』第 3 号, 2003 年, 23-28 頁; André MANDIN et Huguette LAURENTI, «Mme de R.», *Bulletin des Études Valéryennes*, n° 88-89, novembre 2001, pp. 17-28; JARRETY, *Paul Valéry, op. cit.*, pp. 94-101.
- 30) Voir JARRETY, *Paul Valéry, op. cit.*, p. 94.
- 31) VALÉRY, *Cahiers, op. cit.*, t. II, p. 534.
- 32) Voir JARRETY, *Paul Valéry, op. cit.*, pp. 96-97.
- 33) 清水前掲書『ヴァレリーの肖像』, 59-115 頁を参照。
- 34) 同上, 11-12 頁。
- 35) 同上, 38 頁。
- 36) 恒川・今井・塚本前掲論文, 26 頁および 30 頁。
- 37) 今井勉「抽斗にしまった手紙——「ロヴィラ夫人関連資料」から恋文草稿を読む——」, 『東北大学文学研究科研究年報』第 53 号, 2004 年 3 月, 164 頁を参照(なお頁数は冊子版による)。
- 38) 恒川・今井・塚本前掲論文, 26 頁。
- 39) ナルシスという神話的形象に関係するヴァレリーの詩作は晩年まで続くが、本稿では 1890 年から 1894 年までの間に創作されたものを取りあえず「初期詩篇」と呼ぶ。

なお、こう呼称するにあたっては、次の論文を参照した——鳥山定嗣「ヴァレリー『ナルシス語る』の二つの版——『ラ・コンク』誌版(1891)と『旧詩帖』版(1920)——」, 京都大学フランス語学フランス文学研究会『仏文研究』第46号, 2015年10月, 91-123頁。むろん問題の検討に際して、これらだけに資料を限定するわけではない。

- 40) Voir JARRETY, *Paul Valéry, op. cit.*, p. 224 ; JARRETY, «Notice de Stendhal», in VALÉRY, *Œuvres, op. cit.*, t. I, p. 1088. もちろんジャルティの推定を頭から否定するつもりはない。当初は我々も1897年ではないかと考え、ヴァレリーによる記憶違いないしは自己神話化の可能性を探ったが、そう判断するに足るだけの確かな資料を見つけることはできなかった(それは同時に1894年とする証言を否定する根拠も見当たらないことを意味する)。そのため本稿では、ヴァレリーの回想にもとづいて論証を試みる。
- 41) VALÉRY, «Au sujet de Stendhal. À propos de *Leuwen*», *op. cit.*, p. II.
- 42) *Ibid.*, p. L.
- 43) ジャン・ド・ミティについては次の拙稿を参照されたい——高木信宏「スタンダリスム史関連資料——ジャン・ド・ミティ未刊書簡——」, 九州大学フランス語フランス文学研究会『ステラ』第35号, 2016年12月, 39-58頁。
- 44) STENDHAL, *Lucien Leuwen*, œuvre posthume reconstituée sur les manuscrits originaux et précédée d'un commentaire par Jean de MITTY, Paris : Dentu, 1894, *colophon*.
- 45) 前掲拙論, 47頁を参照。
- 46) 『ゴローワ』と『ル・ジュルナル』以外で、1894年中に『ルーヴェン』を紹介した新聞・雑誌は、『アントランジジャン』(5月5日), 『ジュルナル・デ・デバ』(5月9日), 『ユニヴェール』(5月10日), 『ラ・ヴィ・モデルヌ』誌(5月20日), 『ラ・プレス』(6月11日), 『オーロール』(6月17日), 『ラ・フランス・ヌーヴェル』(6月), 『ル・マタン』(9月8日)が確認できたが、『スタンダール総合書誌』の情報には遺漏と誤りがある。Voir Victor DEL LITTO, *Bibliographie stendhalienne générale*, sous la direction de V. DEL LITTO, 8 vol., Moncalieri : CIRVI, 1999-2007, t. I, pp. 195-196.
- 47) SAINT-EGRÈVE, «Nouveau roman de Stendhal», *Le Gaulois*, 22 avril 1894, pp. 1-2.
- 48) Voir Maurice BARRÈS, «Causerie stendhalienne», *Le Journal*, 4 mai 1894, p. 1.
- 49) VALÉRY, «Au sujet de Stendhal. À propos de *Leuwen*», *op. cit.*, p. II.
- 50) Jean-Luc STEINMETZ, *Stéphane Mallarmé. L'absolu au jour le jour*, Paris : Fayard, 1998, pp. 339-340.
- 51) Voir Denis BERTHOLET, *Paul Valéry 1871-1945*, Paris : Plon, 1995, pp. 97 et 104. ドニ・バルトレ『ポール・ヴァレリー 1871-1945』(松田浩則訳), 法政大学出版局, 149-150, 162頁を参照。
- 52) Voir Paul-Henri BOURRELIER, *La Revue Blanche. Une génération dans l'engage-*

- ment 1890-1905, Paris : Fayard, 2007, p. 586 ; voir aussi Victor DEL LITTO, « Documents inédits pour servir à l'histoire du stendhalisme. I - Paul Léautaud. II - Jean de Mitty. », *Stendhal Club*, n° 101, 15 octobre 1983, p. 22.
- 53) Voir Stéphane MALLARMÉ, *Correspondance*, recueillie, classée et annoncée par Henri MONDOR et Lloyd James AUSTIN, 11 vol., Paris : Gallimard, coll. « Blanche », 1959-1985, t. VI, p. 199. ポール＝アンリ・ブールリエによれば、ミティを1895年に『白色評論』誌に紹介したのはマラルメだという (voir Paul-Henri BOURRELIER, « Saint-Cère, l'affaire Lebaudy et *Le Cri de Paris* », *Le blog Revue blanche de Paul Henri...*, 15 septembre 2009, <http://revueblanche.over-blog.com/article-36109536.html>.)。
- 54) Voir Gordon MILLAN, *Les « Mardis » de Stéphane Mallarmé. Mythes et réalités*, Paris : Libr. Nizet, 2008, pp. 91 et 93.
- 55) *Ibid.*, pp. 92-93.
- 56) Voir VALÉRY, *Cahiers 1894-1914, op. cit.*, t. I, p. 442.
- 57) スポールベルク・ド・ロヴァンジュール子爵宛の1894年10月2日付書簡のなかでミティが出版にかかる経費や困難に絡めて、「スタンダールは彼を愛する人々にしか読まれず、そして彼を愛する人々はあまりいません」と記していることから、当時はまだ作家の読者は少なかったことが窺える (前掲拙論, 49頁参照)。
- 58) ヴァレリーは1894年6月6日から約1カ月間、ロンドンに滞在しているので、小説の落筆と読書の時期はそれ以前であろう。
- 59) Voir Claude MARTIN, *André Gide ou la vocation du bonheur I. 1869-1911*, Paris : Fayard, 1998, p. 203. Cf. Éric MARTY, « Chronologie », in André GIDE, *Journal I (1887-1925)*. Édition établie, présentée et annotée par É. MARTY, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1996, pp. LXXIII-LXXIV ; Octave NADAL, « Introduction », in Paul VALÉRY, Gustave FOURMENT, *Correspondance 1887-1933*. Introduction, notes et documents par O. NADAL, Paris : Gallimard, 1957, pp. 16-17.
- 60) GIDE, VALÉRY, *Correspondance 1890-1942, op. cit.*, pp. 430n et 440.
- 61) 『カイエ』の執筆開始時期は諸説あるが、ここではジャルティの推測に従った。Voir JARRETY, *Paul Valéry, op. cit.*, p. 1225.
- 62) Voir Florence de LUSSY, « Dossier », in Paul VALÉRY, *1894 Carnet inédit dit « Carnet de Londres »*. Édition de F. de LUSSY, Paris : Gallimard, 2005, pp. 138-139.
- 63) Voir *ibid.*, p. 29.
- 64) Voir LUSSY, « Introduction », in *ibid.*, p. 15.
- 65) Voir JARRETY, *Paul Valéry, op. cit.*, p. 142.
- 66) 松田浩則「ヴァレリー 1894年」, 東京大学仏語仏文学研究会『仏語仏文学研究』, 2011年5月, 第42号, 173-175頁を参照。
- 67) 同上, 173頁を参照。

- 68) 「R夫人関連資料」を精緻に読み解いた松田浩則によれば、「夫人をヴィーナスへと結びつけていたはずの濡れた髪は、彼の苦悩が深刻になるにつれてメドゥーサの属性そのものへと転換していき、文字どおり彼の身を縛っていく」としている（前掲「ヴァレリー、あるいはロヴィラ夫人の変貌」, 469頁）。
- 69) 松田前掲論文「ヴァレリー 1894年」, 174頁を参照。
- 70) 今井前掲論文「抽斗にしまった手紙——「ロヴィラ夫人関連資料」から恋文草稿を読む——」, 169-168, 165頁を参照。
- 71) Voir Paul VALÉRY, «Dossier “Madame de R.”», in *Notes anciennes IV*, BnF: NAF 19116 / ff. 44, 56, 58, 63 v^o, 64 r^o, 68 r^o, 72 v^o et 73 r^o.
- 72) 今井前掲論文「抽斗にしまった手紙——「ロヴィラ夫人関連資料」から恋文草稿を読む——」, 165頁を参照。
- 73) GIDE, VALÉRY, *Correspondance 1890-1942*, *op. cit.*, pp. 445-446.